

# うひはたぶみ (初機踏)

H.A.M.A.木綿庵だより  
第7号  
2017(平成29)年7月26日  
(編集発行 梅田正之 090-5042-7775)

## 発想の起源 — 渋沢栄一と豊田佐吉 —

「日本における綿の歴史、綿との関わりを、文化として捉えた総合的な展示、学習施設があればいいのに…」と思います。「いくらでもあるではないか!？」と思われるかもしれませんが、「文化として捉えた総合的な展示施設」とは、各地にある歴史資料館や、郷土博物館の展示の枠を超えた、綿への多面的なアプローチを前提とした展示施設を意味しており、そのような観点でつくられた施設は管見の限り、見当たらないのです。

それは、たとえば植物学的な綿の分類をはじめ、世界の綿の歴史や分布。世界各地の綿花の実物展示。中世以降に展開する日本における綿の歴史、中国や朝鮮との貿易に与えた影響、各地の綿花の実物展示。江戸時代の幕府の政策、近世の農村経済や貨幣経済に与えた甚大な影響、庶民の生活スタイルに与えた甚大な影響。そして、近世から近代にかけての綿作りの盛衰、近代紡績業の確立と技術革新(織機の改良と発明)の歴史、地域産業に与えた影響等々を、コンパクトにまとめたわかりやすい展示、解説などを備えた施設です。

なぜそのようなことを考えるようになったかといえば、とにかく「綿は、おもしろい!」という一言に尽きます。「綿」をキーワードに広がる世界は多方面にわたり、しかも魅力的です。その上、「人間(人類)とは何か?」「生きるとはどういうことか?」からはじまり、「美とは?」「智恵とは?」「機械とは?」「進歩とは?」「文明/文化とは?」「産業/経済とは?」という、普段はあらためて考えることのない、私たちの存在や社会を支えてくれている基盤というか背景について、根本から見つめ直すきっかけを与えてくれます。人類はなぜ、「衣」を身にまとうようになったのでしょうか。そもそも「衣」とは何を意味するのでしょうか。また、繊維(細くて長いモノ)は「織る、編む、組む」のいずれかで仕立てられますが、その違い、発想の起源は何処にあったのでしょうか。少しでも美しく、速く、人々が過重労働に苦しむことなく「織る」にはどうしたらよいのでしょうか。

さて、明治時代に政府が殖産興業を目的に、紡績業育成政策の一環として全国で設立を促したいわゆる「十基紡(じつきぼう)」は、ほぼ失敗に終わりました(高村直助『日本紡績業史序説(上)』(昭和46年、41頁)。ところが、同じ時期(明治16年)に渋沢栄一が構想して開業した大阪紡績会社(現在の東洋紡の前身)は大成功をおさめます。

また、慶応3年(1867)、遠江国敷知郡(静岡県湖西市)に、大工の長男として生まれた豊田佐吉は、明治18年(1885)に手織り機の改良と発明を志し、その後数々の特許を取得。大正13年(1924)、無停止杼換式豊田自動織機(G型)を完成させます。これが、当時世界の繊維機械業界を牽引していたイギリスのプラット・ブラザーズ社の目にとまり、世界一の性能を誇る織機と認められ、特許権の譲渡を求められるようになります。佐吉はこの譲渡申請を受け入れ、その代価(現在の貨幣価値に換算して約20億円)が、のちに自動車の研究開発を進める上での潤沢な資金となり、現在のトヨタ自動車へとつながっていくことになるのです。

写真は豊田自動織布工場跡に建つ「トヨタ産業技術記念館」の正門 →



### Monthly Data

【天理やまのべ木綿庵】(問い合わせ件数 平成29年6月26日～平成29年7月25日)  
群馬県1、滋賀県1、奈良県2、熊本県1

【H.A.M.A.木綿庵】(平成29年6月26日～平成29年7月25日)

メールを含む各種相談件数2、綿畑や作業場の見学を兼ねた事前申込済来庵者数1件3名



### 【十基紡と大阪紡績、豊田自動織機に関する参考資料】

巻頭言に記した十基紡と大阪紡績については、その失敗と成功の理由が高村直助『日本紡績業史序説(上)』(昭和46年、塙書房)にわかりやすく分析、整理されています。また、十基紡の一つである奈良県天理市豊井町の豊井紡績所については、絹川太一『本邦綿糸紡績史』第2巻(昭和12年、日本綿業倶楽部、327～367頁)に詳細な記述があります。

豊田佐吉が発明した織機の数々は、当時世界一と認められた無停止杼換式豊田自動織機(G型)を含めて、トヨタ産業技術記念館の繊維機械館で見学することができます。木製の手織り機から、G型織機に至るまでの工夫の過程は、カラクリ人形を連想させ、努力とひらめきの賜物であることが実感でき、見応えがあります。なお、G型織機の特許権譲渡に関わって得られた代価の時価換算は、平成29年7月17日に繊維機械館のツアーガイドの方から直接教えていただいたものです。

### 《綿の栽培記録 2017》 - 平成29年度版 その3 -

- 7月7日(金) 和綿の開花を初めて確認。背丈はおおむね80cm。写真左。
- 7月13日(木) 洋綿の開花を初めて確認。背丈はおおむね80～90cm。写真右。
- 7月20日(木) 山辺の道沿いに、「綿畑一般公開中」の英語による看板を設置した。



写真中央は、草刈りを終えたばかりの1号畑の綿畝の全景。3列のうち左2畝が和綿。右1畝が洋綿。

### 【綿の加工の作業記録】 (梅田1人の作業量)

- ・糸車を用いての糸紡ぎ量 (洋綿)

6月26日～7月25日(作業実日数25日) 糸の総量88.6g(23.63匁) 総時間388分(6時間28分)

※1分間≒0.228g 1時間≒13.7g(3.7匁)

### 【研修等の記録】

- ・平成29年6月27日「西脇市郷土資料館」(兵庫県西脇市)を訪問、見学
- ・平成29年6月27日「播州織工房館」(兵庫県西脇市)を訪問、見学
- ・平成29年7月17日「トヨタ産業技術記念館：繊維機械館」(愛知県名古屋市)を訪問、見学
- ・平成29年7月23日「相楽木綿伝承館：機織り教室初級⑧機織り」(京都府相楽郡精華町)受講
- ・平成29年7月24日「相楽木綿伝承館：機織り教室初級⑨機織り」(京都府相楽郡精華町)受講

【以下の写真は、左がトヨタ産業技術記念館の繊維機械館ホールに展示されている環状織機。豊田佐吉が明治39年(1906)に発明した独創的な織機。中央が、臥雲辰致が明治6年(1873)に発明したガラ紡機。右が、7月20日に新たに設置したH.A.M.A.木綿庵の英語版案内板です】

